

A Suggestion to the Way of Skilled and Adequate Interpretation in the Star-Wave Test : According to the Comparison Between the Learners and the Experts.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 香月, 菜々子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5846

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



星と波描画テストの解釈における留意点

— 初学者と熟練者の着目点の比較を通じて —

A Suggestion to the Way of Skilled and Adequate Interpretation in the Star-Wave Test:

— According to the Comparison Between the Learners and the Experts. —

香月 菜々子*

Nanako KATSUKI

<キーワード>

星と波描画テスト, 描画解釈の着目点, Semantic Differential (SD) 法

<要 約>

本研究では、星と波描画テストの習熟に焦点をあて、本テストの初学者が描画のどのような特徴を手がかりとして解釈を行うことが、的確な解釈の実現のために望ましいと考えられるのかについて、熟練者の視点を参考にしつつ検討がすすめられた。星と波描画テストの初学者である臨床家6名に描画の印象評定を依頼し因子分析を行った結果、初学者は「画面構成(第Ⅰ因子)」「描画表情(第Ⅱ因子)」「アピール性(第Ⅲ因子)」に着目し、解釈の手がかりとしていることが明らかとなった。さらに、先行研究において明らかとなった熟練者の結果と比較したところ、初学者においては①着目点は3種に留まり、熟練者の判断基準と比べてより未分化であること ②描画を一つの絵画として距離を置いて眺める視点が優勢 ③視覚的にインパクトのある表現に注目する傾向がある、以上の3点が明らかとなった。こうした特徴を踏まえて、よりの確な描画の読み取りをめざし、解釈の方向性や具体的な指針について提案を行った。

1. はじめに

(1) 「星と波描画テスト」とは？

星と波描画テストStar-Wave-Test (独Der Sterne-Wellen-Test) は、1970年代にドイツの心理学者ウルスラ・アヴェ＝ラルマンAve-Lallemant, Uによって開発された描画テスト／描画法である。内寸10.5×15.3cmの長方形の枠があらかじめ印刷されたA 5版 (A 4版の半分の大きさ) の専用の用紙を使用し、鉛筆で「海の波ocean waves」と「星空starry sky」を描いてもらうというもので、時間制限がなく、あくまで描き手自身のペースで自由に組み立てるように作成されている³⁾。

本テストは当初、ドイツ語圏を中心とする欧州諸国において、就学前児童のスクリーニングを目的とした「発達機能テスト」として用いられていた。しかし後に開発者自らが、このテストの別の側面、すなわち描き手のパーソナリティ特性をも反映することを発見し、主に筆跡学や深層心理学 (初期の精神分析および分析心理学の理論) を援用することで、投映法 (パーソナリティ・テストの一種) としての使用を模索した経緯が知られている^{3) 4)}。

2013年現在、日本国内においては、教育、医療、司法をはじめとするさまざまな心理臨床の現場において、主に投映法としての活用が多く見られる。対象も児童に限定することなく、4歳半から80代後半にわたる幅広い年齢層に適用されている。またパーソナリティの理解もさることながら、精神的不調からの回復過程の振り返りや¹⁰⁾、心理療法導入期における描き手とセラピストの関係づくりの一助として役立てられている^{3) 4) 10) 11) 12) 18)}。

(2) 星と波描画テストの性質について

馬場 (2003) は投映法で用いられる刺激の性質について、「内的な想像活動を刺激したり、感覚や感情の反応を誘発したりするものが多い…＜中略＞…それゆえに通常の社会生活では表面化しにくいような被検者の願望や欲動や空想の世界が顕在化しやすくなる」と指摘しているが⁵⁾、星と

波描画テストにおいても同様のことが生じていると考えられる。星と波描画テストでは従来、自然風景の中でもとくに原始的ともいえる「星空」と「海の波」のモチーフが刺激として用いられることにより、日常的な枠組みにとらわれることなく、描き手本来の自由な応答が可能になると言われている^{3) 4) 11) 12) 18)}。

星と波描画テストの解釈仮説として、創案者のAve-Lallemant (1979/1994) は、描き手が「今、世界をどのように体験しているのか」、すなわち描き手の体験様式や体験世界そのものが映し出されると述べている。星と波描画テストと同様、自然風景の描写が課題であるバウムテストの場合、用紙を描き手を取りまく環境に見立てて、その環境の中に位置づけられたいわば「自己の全身像」を体験したり連想したりすると説明されるが、星と波描画テストでは描き手が自分の内的な世界体験を連想するとの見解を、彼女は自らの臨床経験から明らかにしている^{3) 4)}。これを支持する意見として、リーネル (2000) は「星と波テストはクライアントの＜世界＞に対する無意識的態度と固有の関係について明らかにする」と著書の中でまとめている¹⁸⁾。また香月 (2009) は、用紙の枠内に広がるのは「描き手を主体とした世界体験」、あるいは「描き手の内側に広がる主観的な体験世界そのものの像」と説明している。そのほか、健常群と臨床群が描く星と波描画テストを比較した研究によると^{9) 11)}、健康度の高い人は星と波描画テストを媒介として自分自身を表現することや、情緒的に豊かな体験を他者と共有しようとするなど、世界との関わり方の態度がより積極的との傾向を明らかにしており、こうした特徴から、星と波描画テストが描き手の世界との関わり方の度合や、また世界に対して有している内的な構えや態度そのものを浮き彫りにするのだろうと考えられている。

2. 問題

(1) 描画解釈における全体印象の位置づけについて

星と波描画テストに限らず、描画を解釈する際

に大切なことは、まずは描かれた作品を眺め、全体的印象をつかむという視点である^{1) 2) 6) 8) 14) 15) 19)}。

Borlander (1977/1999) は樹木画解釈の最初の段階を「直観的熟視の段階」と称している。自分が知覚するものに「入って感じる」いわば原始人のような感覚を用いて絵全体を眺め、その全体的印象を捉えるといった、まさに芸術家の眼差しを用いるよう推奨している⁶⁾。

高橋 (1986) はこの方法にならい、樹木画テストの解釈手順を「①全体的評価②形式分析③内容分析」の3段階に分類している。さらに①の全体的評価について「描かれた「木」の意味を理解するための準拠枠であり、形式分析と内容分析は、この準拠枠に基づいて行われる」と説明しており、全体的評価をいわば解釈における重要な基盤として位置づけている¹⁹⁾。これと同様の見方として、鍋田 (2003) は描画解釈の流れについて「まず全体的な印象から入り、次に部分的・個別的な内容を確認し、そして最後に再び全体像を統合的に描くと言う方法が望ましい」との見解を明らかにしており¹⁵⁾、いずれも全体性という視点のもと、描画の解釈が進められることの肝要さが伝えられている。

星と波描画テストの解釈手順の第一段階では、まず絵全体に注目する「絵の分類」が求められるが、これはおそらく偶然ではないだろう。解釈の最初の段階でテスト全体の印象から絵のスタイルを分類する作業が行われることは、そのあとに続く段階で得られるさまざまな知見を統合させる基盤や方向性を施行者の中に築く手助けとなっているのではないだろうか。

このように描画を解釈する際の基盤や方向性を担うのが「全体的印象」であり、部分的な特徴を詳細に検討したのちに知見を統合する過程においても、“全体”という視点は重視される。描画の全体的印象は、描画解釈においていわば要とも言える役割を担っていると考えられる。それでは、検査者は、具体的にどのような全体的印象の特徴をもとに星と波描画テストの解釈を進めていけばいいのだろうか。

(2) 星と波描画テスト解釈に有用な着目点について

解釈における“目の付け処”は、通常、検査者の経験に基づいた主観的で直感的な判断に委ねられており、より客観的な視点から検討を行うような研究は未だ蓄積が少ないのが現状である。描画テストの初学者と熟練した心理臨床家とでは、全体的印象から得られる情報の量が異なるとの指摘がなされている^{7) 19)}。初学者の多くは、既存の知識を頼りに描画を知的に分析しすぎてしまい、結果、情報は断片化し、全体像が見失われてしまう。これに対して熟練者は、様々な知見が経験の中に統合されているため、絵を全体で眺めたときに、自然と解釈に重要な特徴が浮かび上がり、目に留まるとのことである。長年の臨床経験に加えて、描画と真摯に向き合ってきた経験の蓄積により、全体的印象から引き出される描き手についての情報量も自ずと異なってくるものと考えられる。

ところで、絵の全体的印象の測定を可能にする方法としてはOsgood (1952) のSD法 (Semantic Differential Technique) による形容詞対の印象評定法が挙げられる¹⁷⁾。星と波描画テストの全体的印象の詳細の検討を目的として、香月・横山 (2007) は、星と波描画テストに見られる“風景”としての特性や各アイテムの特徴を示す形容詞対を組み込んだ星と波描画テスト専用の45項目のSD法による印象評定尺度を新たに作成し、星と波描画テストの熟練者に絵の評価を依頼した¹³⁾。ここで扱う熟練者の定義は、星と波描画テストのトレーニングを受け、星と波描画テストをはじめとする芸術的手法を現場で日常的に用いている中堅およびベテランの臨床心理士 (平均臨床経験年数：約16年) であり、彼らがこれまでに目にした本テストの枚数は平均約760枚 (SD=487.85) である。因子分析の結果、彼らが星と波描画テストを解釈する際に着目している全体的印象として、「生命感」「強調」「情景性」「整合性」の4つが特定され、熟練者はこれら4つを<解釈の軸>として、星と波描画テストの読み取りを試みていることが明らかとなった (表1, 表2参照)。加えてこの評定尺度が、健常例と臨床例の弁別に役立つ可能性も示

表1 プロマックス回転後の因子パターン行列および因子間相関 (香月・横山2007)

項目(形容詞対)	因子負荷量				共通性
	I	II	III	IV	
I. 「生命感」					
13)生気のないーいきいきとした	-.999	-.401	.062	.048	.879
25)陰鬱なー快活な	-.961	.006	.228	-.043	.966
21)悲しいー嬉しい	-.953	-.091	.240	-.029	.897
26)開放感のあるー閉塞感のある	.905	-.249	.070	-.151	.944
18)楽しいー苦しい	.882	-.147	-.077	.067	.923
11)輝きのあるーくすんだ	.880	.333	-.245	.193	.812
17)のびのびしたーこせこせした	.874	-.063	.194	-.222	.743
10)明るいー暗い	.872	-.148	-.295	-.046	.884
23)空虚なー充実した	-.868	-.348	-.230	-.200	.902
24)自由なー窮屈な	.867	-.279	.133	-.185	.902
22)荒廃したー発展的な	-.815	-.006	.025	-.293	.903
9)暖かいー冷たい	.810	-.054	.168	-.062	.699
16)流れのあるー停滞した	.810	.297	.117	-.142	.561
20)不安なー安心した	-.762	.182	.105	-.216	.864
19)リラックスしたー緊張した	.748	-.357	.247	-.178	.837
45)気持ちがいいー気持ちが悪い	.679	-.255	.161	.179	.860
II. 「強調」					
2)強いー弱い	.121	.934	-.127	.137	.791
41)濃いー薄い	-.013	.927	.094	.174	.802
14)激しいー穏やかな	-.009	.890	-.114	-.060	.874
40)インパクトのあるー印象に残らない	.061	.889	.224	-.057	.789
42)黒っぽいー白っぽい	-.201	.845	.302	.099	.862
31)現実的なー空想的な	-.353	-.688	-.095	.226	.512
39)特異なー普通の	-.274	.672	.214	-.107	.707
8)ゆったりしたーせかせかした	.258	-.554	.325	.096	.710
III. 「情景性」					
4)平面的なー立体的な	-.111	-.375	-.876	.092	.793
5)奥行きのあるー奥行きが無い	.044	.198	.802	.080	.702
43)敏感なー鈍感な	-.189	.012	.802	.019	.663
44)繊細なー粗野な	-.097	-.319	.697	.166	.758
IV. 「整合性」					
30)几帳面なーだらしない	.003	.153	-.126	1.024	.891
33)雑なー丁寧な	-.106	-.117	-.251	-.792	.873
36)慎重なー軽率な	-.256	-.366	.104	.760	.830
6)まとまったーばらばらな	.250	-.166	.212	.527	.693
因子間相関	I	II	III		
	II	-.326			
	III	.082	-.108		
	IV	.347	-.304	.416	

表2 熟練者のデータにおける各因子と構成概念の関係（香月・横山、2007）

因子	構成概念
I	4) 気候 5) 光の量 6) エネルギー 7) 動き 8) 雰囲気 1 1) 健康度 (計6)
II	1) 状態像 3) 時間・速度 6) エネルギー 9) 現実⇔幻想 1 3) インパクト 1 4) 色合い (計6)
III	1) 状態像 2) 空間構成 (計2)
IV	2) 空間構成 8) 雰囲気 1 0) 処理の仕方 (計3)

唆されている¹³⁾。さらに香月（2009）は、この〈解釈の軸〉の安定性を検討すべく、前回の評定から約2年後に同熟練者に再評定を依頼し検証を行った結果、前回のデータ分析の結果と極似していたことから、熟練者の着目点は決して恣意的なものではなく、ある程度以上の一貫性を持った確たる視点であることが明らかとなった¹¹⁾。このことは、職人技ともいえる熟練者のテスト解釈の軸の安定性を証明し、そのまなざしの方向性としての着目点の存在を、客観的な指標を通じて明らかにした一例だと言えるであろう。また、描画法または描画テストの施行という技法の体得においては、初学者はとくに描画解釈の点で苦労を強いられることが多いが、これら4つの着目点は解釈の指針として、十分役立つものであると考えられる。

しかし実際のところ、初学者の描画に対するまなざしと熟練者のまなざしとは、一体どれほどの隔りがあるのだろうか。たとえば星と波描画テストを学び始めて間もない臨床家が解釈を試みた際、全体的印象のどこに着目し、解釈を行う傾向があるのだろうか。彼らの視点の特性については、トレーニングの場面において経験的に知られている部分はあるが、客観的な視点から検討を行うような研究はこれまで行われておらず、知られていないのが現状である。

初めて星と波描画テストを学び、実践で用いる臨床家にとって、特にどのような点に留意しながら

描画解釈を進めることが熟練者のまなざし、すなわち的確な読み取りに近づくための一歩になり得るのだろうか。

3. 目的

これまでの一連の研究から得られた知見を踏まえて、本研究では、星と波描画テストの初学者を対象に、描画の全体的印象の評定を依頼し、その結果と熟練者の結果との比較を試みることによって、双方の解釈における着目点の特徴を浮き彫りにすることを目的とする。星と波描画テストを初めて学ぶ臨床家にみられる描画解釈の着目点が、熟練者のそれとどのような点で重なり、そして異なるのかについて明らかにすることで、よりの確かな読み取りのための方向性や指針の提案を行いたい。

4. 方法

(1) 調査協力者

本研究では描画の評定者として、臨床家6名を迎えた。彼らの臨床歴は3年以上10年未満の臨床心理士であり、いずれも描画をはじめとする投映法もしくは芸術的手法に親しみ、日常的に用いて心理面接を行っている臨床家である。今回の研究では「星と波描画テストの習熟」に焦点を当

てているため、描画の初学者は対象とせず、“描画にある程度親しみのある臨床家が新たに星と波描画テストを学ぶ”という状況を想定している。したがって描画の初学者は対象とせず、すでに描画の実践経験のある臨床家に調査を依頼している。彼らはみな星と波描画テストの知識はあるものの、自分で描いた経験や、他者に施行した経験は一切なく、実物（実際の作品）を扱うのは今回が初めてであることから、本研究では星と波描画テストの「初学者」と見なし、「熟練者」^{11) 13)}との比較の対象とする。

(2) 評定材料

本研究にて評定対象となる星と波描画テストは、香月・横山（2007）にて用いられた素材と同じものであり、健常群25例、臨床群25例から構成されている^{11) 13)}。健常群は18歳～26歳の健康な大学生、大学院生および社会人で、男女比は約1:2、平均年齢は23.27歳（SD=3.24）である。いずれも研究の協力への承諾を得た上で個別に施行されている。臨床群は17歳～29歳の高校生、大学生、大学院生および社会人で、自ら精神的不調を訴えて精神科クリニックの外来に当時通院中の患者である。男女比は5:4で、平均年齢は24.15歳（SD=5.96）であり、診断名ごとの内訳は統合失調症3名、気分障害（「大うつ病」「気分変調性障害」を含む）8名、適応障害5名、不安障害6名、摂食障害3名となっている。臨床群については、初診および再診のインテークの際、診察室にて問診が終了した時点で星と波描画テストが施行されている。テスト施行期間は1998年10月～2005年5月であった。

(3) 手続き

星と波描画テスト専用の印象評定尺度（香月・横山，2007）を用いて、全50例の星と波描画テストの7段階評定を調査協力者である初学者6名に依頼した。今回用いられた45項目の印象評定尺度は、以下の14グループの構成概念により作成されている：

- 1) 状態像
- 2) 空間構成
- 3) 時間・速度

- 4) 気候
- 5) 光の量
- 6) エネルギー
- 7) 動き
- 8) 雰囲気
- 9) 現実⇔幻想
- 10) 処理の仕方
- 11) 健康度
- 12) 完成度
- 13) インパクト
- 14) 色合い（濃淡）

評定の期間は2005年12月～2007年1月であった。

(4) 結果の処理方法・分析方法

50枚の星と波描画テストの印象評定を星と波描画テストの初学者6名が行い、各描画の各項目について、評定の平均値を得点とした。そして因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、因子を抽出した。また分析の結果をもとに、各描画の因子得点を算出し、得点の高低と実際の描画との比較を通じて、各因子が示している特徴について検討を行った。

5. 結果

初学者6名によって評定された45項目についてそれぞれ、最小値・最大値・平均・標準偏差を確認したところ、不良項目は見受けられなかったため、45項目のまま分析を行った。スクリープロットおよび初期解における固有値の減衰状況（第1因子から第6因子まで、8.972, 6.137, 4.970, 1.422, .646, .561）から判断し、3因子が妥当と考えられた。因子数を3に固定し再度因子分析を行った結果、因子負荷が1つの因子で±0.50以上で、かつ、2因子にまたがって±0.40以上の負荷を示さない25項目を選出した。なお、削除された項目は以下の通りである：

- 1) 柔らかい－硬い
- 8) ゆったりした－せかせかした
- 9) 暖かい－冷たい
- 13) 生気のない－いきいきとした
- 14) 激しい－穏やかな
- 16) 流れのある－停滞した
- 17) のびのびした－こせこせした
- 19) リラックスした－緊張した
- 20) 不安な－安心した
- 22) 荒廃した－発展的な

- 23) 空虚な－充実した
- 26) 開放感のある－閉塞感のある
- 27) 苛立つ－和む
- 28) 落ち着いた－落ち着きのない
- 29) にぎやかな－淋しい
- 31) 現実的な－空想的な
- 32) 具体的な－抽象的な
- 35) 意欲的な－無気力な
- 37) 単純な－複雑な
- 45) 気持ちがいい－気持ちが悪い

(計20項目)

削除された項目の中には、「13) 生気のない－いきいきとした」をはじめ、「9) 暖かい－冷たい 16) 流れのある－停滞した 17) のびのびした－こせこせした 19) リラックスした－緊張した 20) 不安な－安心した 22) 荒廃した－発展的な 23) 空虚な－充実した 26) 開放感のある－閉塞感のある 45) 気持ちがいい－気持ちが悪い」など、先行研究のなかで熟練者が重視した全体的印象の一つ「生命感」と関連の深い形容詞が含まれている点が注目される^{11) 12)}。加えて、「8) ゆったりした－せかせかした 14) 激しい－穏やかな」といった、筆跡や描線の流れを示唆する形容詞の一部が削除されている点も、特徴の一つと考えられよう。

続いて、プロマックス回転を行った結果の因子パターン行列、および因子間の相関は、表3に示されたとおりである。先行研究における熟練者を対象としたデータは4因子構造を示していたのに対し^{11) 13)}、本研究の初学者を対象としたデータにおいては3因子が抽出され、異なる因子構造が示された。このことは星と波描画テスト解釈において、初学者の着目点と熟練者のそれとが性質として異なることを示すと考えられる。今回得られた3因子構造については、先行研究と同様、因子負荷量の高い項目を中心に、各因子を構成する形容詞の解釈を行った。

なお、各因子に集約された構成概念の分類は表4に示されている。熟練者の結果(表2参照)と比較すると、初学者がとらえ得る描画の特徴の範囲は、内容が限定されることが示されている。なかで

も初学者群の結果においては「健康度」に関する項目が含まれていない一方で、「完成度」が新たに因子の構成概念として組み込まれたことから、描き手の主に精神的な健康状態を感じ取ろうとする傾向は乏しく、むしろ絵としての“つくり”や“出来”，すなわち作品としての巧拙にまつわる特徴にも目が向けられやすい可能性が示唆された。

6. 考察

(1) 初学者の着目点の特徴について

表3に示された結果をもとに、各因子を構成する形容詞についての解釈を行った。

1) 第I因子

第I因子は、「慎重な－軽率な」「雑な－丁寧な」「繊細な－粗野な」「几帳面な－だらしのない」「洗練された－ぎこちない」「奥行きのある－奥行きのない」「まとまった－バラバラな」など全10項目から構成されており、描かれた作品の形式や構成に関する印象でまとめられている。第I因子に集約された構成概念は「空間構成」「処理の仕方」「完成度」の3つであり(表4参照)、星と波描画テストが、一枚の絵としてどのように形作られ、整えられ、仕上げられているのか、といった絵としての全体の“つくり”を表す形容詞の一群であると考えられ「画面構成」の因子と名づけた。

今回抽出された「画面構成」の因子には、先行研究において熟練者に見られた「情景性」の因子(形式的特徴に加えて、風景らしさや、描画に描き手の情緒体験がどの程度含まれているか。星と波のモチーフにどの程度強力で描き点自身の投射が行われているか)と「整合性」の因子(形式的な特徴に加えて、画面全体に反映される一貫性や適度な緊張感)にそれぞれ集約される形容詞が混ざり合って含まれているのに加えて、「洗練された－ぎこちない」や「バランスのとれた－アンバランスな」といった絵としての出来、技巧ないし完成度を示す内容の形容詞が加えられていると考えられる。以上のことから、熟練者において臨

表3 プロマックス回転後の因子パターン行列および因子間相関：初学者群

項目(形容詞対)	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
<u>I. 「画面構成」</u>				
36) 慎重な－軽率な	.895	-.251	.003	.773
33) 雑な－丁寧な	-.893	-.221	-.213	.880
44) 繊細な－粗野な	.889	-.168	-.134	.807
30) 几帳面な－だらしない	.873	.205	.237	.836
38) 洗練された－ぎこちない	.817	.241	-.109	.862
43) 敏感な－鈍感な	.789	-.319	.110	.619
5) 奥行きのある－奥行きのない	.774	-.090	.041	.570
6) まとまった－ばらばらな	.771	.285	-.109	.821
4) 平面的な－立体的な	-.760	.175	-.198	.557
7) バランスのとれた－アンバランスな	.685	.335	-.201	.796
<u>II. 「描画の表情」</u>				
25) 陰鬱な－快活な	.039	-.999	-.032	.970
21) 悲しい－嬉しい	.008	-.964	-.121	.884
10) 明るい－暗い	-.140	.947	-.091	.907
11) 輝きのある－くすんだ	-.019	.917	.113	.797
12) はっきりした－ぼんやりした	-.256	.775	.400	.631
18) 楽しい－苦しい	.298	.741	-.238	.896
24) 自由な－窮屈な	.315	.608	-.299	.758
<u>III. 「アピール性」</u>				
41) 濃い－薄い	.071	.013	.973	.921
2) 強い－弱い	.100	.255	.896	.744
3) 重い－軽い	.229	-.226	.877	.877
40) インパクトのある－印象に残らない	.084	.046	.840	.673
42) 黒っぽい－白っぽい	.270	-.284	.838	.860
34) 大胆な－臆病な	-.120	.224	.756	.575
39) 特異な－普通の	-.022	-.157	.706	.584
15) 動的な－静的な	-.332	.356	.694	.632
因子間相関	I	II		
	II	.204		
	III	-.178	-.244	

表4 初学者のデータにおける各因子と構成概念の関係：初学者群

因子	構成概念
I	2) 空間構成 10) 処理の仕方 12) 完成度 (計3)
II	5) 光の量 8) 雰囲気 (計2)
III	1) 状態像 7) 動き 10) 処理の仕方 13) インパクト 14) 色合い (計5)

床群と健常群のスクリーニングに重要とされた「情景性」と「整合性」それぞれの着目点を^{11) 13)}、初学者は弁別し得ずに、未分化のまま受け取っている可能性が示唆される。したがって、結果として描画の全体的印象から得られる情報は肌理が荒いものとなり、情報量として少なくなるだろうと考えられる。加えて初学者は、絵の完成度や巧拙に関する特徴に目を留める傾向が見受けられることから、形式的な特徴を吟味する際に描き手の技巧を手掛かりとして一つの全体的印象としてとらえ、描画の解釈に役立てる傾向があることが示された。一方の熟練者においては、絵の巧拙にまつわる項目は一切含まれておらず、解釈の手掛かりとしてほとんど注意を払っていないことがわかる(表1, 2 参照)。むしろ因子を構成する項目から想像するに、形式的な特徴を捉えていく中で描き手の情緒体験と、精神活動のムラの少なさや適度な緊張感など、巧拙とは別次元の特徴を丁寧に感じ取りながら、解釈仮説を検討しているものと考えられる。

2) 第II因子

第2因子は「陰鬱な-快活な」「悲しい-嬉しい」「明るい-暗い」「輝きのある-くすんだ」「楽しい-苦しい」など、全7項目によって構成されており、星と波描画テストの絵画的な特徴、すなわち画面の明るさや風合い、そして表現を通して伝わってくる描き手の情緒に関する印象でまとめられている。第II因子に集約された項目の構成概

念は「光の量」と「雰囲気」の2種であり(表4参照)、描画面全体に漂うように感じられる空気の状態や、描き手の情緒に関する形容詞の一群であると考えられる。描画を一つの作品として鑑賞した際に感じられる特徴、いわば“作品の顔”や“作品の表情”ともいうべき、どちらかといえば表面的でパッと見て捉えられる全体的印象に注目していることが明らかとなった。また、描き手の情緒と関連のある項目が含まれていることから、第II因子を「描画の表情」の因子と名付けた。7項目に代表されるような視点を通じて、描画ひとつひとつが有するそれぞれの雰囲気や光の加減を見つめると同時に、描き手の心の様相をそこから感じ取り、解釈へとつなげているように見受けられる。

ところで興味深いことに、熟練者の「生命感」の因子には、上述の7項目に加えてさらに9項目が集約されている^{11) 12)}。熟練者は、作品全体が生き生きしているかどうかを重視しており、ここでいう“生命感”を感じ取るために、作品を積極的に追いかけ、多くの視点から情報を集めていることを示している。「生命感」に集約されるこれら数多くの視点が単純な寄せ集めではないことは、この着目点が先述の「情景性」や「整合性」とともに、臨床群と健常群のスクリーニングに役立つことが示されている点で明らかである。詳細を述べると、先述の9項目には「生気のない-いきいきとした」「気持ちがいい-気持ちが悪い」「のびのびした-こせこせした」「暖かい-冷たい」「荒廃した-発展的な」など、星と波の描画

が、果たして有機的で躍動感や弾力性にあふれ、充実していて心地よいものであるのか、あるいは無機質で生気がなく、冷たく停滞したものであるのかといった、あたかも、目で見て肌で感じるような感覚が含まれており、Borlander(1977/1999)が指摘するような「直観的熟視の段階」⁶⁾、すなわち描画面の内側に”入って感じる”感覚が含まれた視点なのではないかと考えられる。

星と波描画テストを臨床の実践で用いる際、作品を真ん中に描き手とセラピストとで対話(フィードバックを含む)を進めていくのだが、そのプロセスにおいて、セラピストはあたかも、星と波描画テストの枠内に広がる空間の内側に、描き手とともにふたりで佇んでいるような感覚を覚えることがある。描き手の体験世界そのものを追体験している感覚は、ロールシャッハ・テストをはじめとする投映法の技法においては自ずと生じてくるものであるが、本テストの場合、風景画としての持ち味の影響と考えられるが、描き手とセラピストの間で今や共有された描画空間の“居心地”を視覚を通じて肌感覚でつぶさにとらえてくことで、描き手の心模様をまさにその瞬間に体験しているかのような場が二人の間で展開することがある。そしてこの体験をふたりで共有することで、描き手についての理解がお互い深まる、といった、描画を間に挟んだ関係づくりが促進されるが、先述の熟練者の視点は、上記のような描画を扱う際の臨床的な姿勢とも重なり、より実践的なものであると考えられる。

したがって、本研究で明らかとなった初学者の着目点である第Ⅱ因子には、描画面の内側に”入って感じる”感覚によって得られる印象の項目は含まれていないことから、星と波描画テストに入り込んで特徴を捉えていくというよりも、むしろやや距離を置いて遠くから絵全体を眺めるような視点、いわば描画の表層・表の顔から感得するような視点が中心的であると考えられる。描き手がまさに作品を描いた時の臨場感と体験の様相を積極的に感じ取ろう、描き手の足跡を辿ろうといった、鑑賞者側の運動感覚を駆使するような追体験の姿勢は、セラピストが経験を積むことによって徐々

に培われる視点のひとつなのではないかと考えられる。

3) 第Ⅲ因子

第Ⅲ因子は「濃い-薄い」「強い-弱い」「インパクトのある-印象に残らない」「黒っぽい-白っぽい」「特異な-普通の」など、全8項目によって構成され、「状態像」「動き」「処理の仕方」「インパクト」「色合い」の5種の構成概念が包含されていることが分かる(表4参照)。これらはいずれも星と波のモチーフの描かれ方、すなわち筆跡の特徴から読み取り可能な特徴であり、描き手の有する衝動性や、鑑賞者であるセラピストに向けられる訴えやメッセージの強さを意味する形容詞の一群と考えられる。したがって第Ⅲ因子は、星と波描画テストを一目見たときに感得される筆跡の色調がもたらすインパクトや、周囲に対するメッセージ性の強さを意味すると考えられ、「アピール性」の因子と名付けた。

表3において、項目の集まりを見ると、8項目のうち上述の5項目は、いずれも熟練者の「強調」の因子に集約された項目と重なりを見せており、いずれも筆跡の種類や質感、画面のぬり方などに注目されている。今回の初学者群にて抽出された第Ⅰ因子では、描かれたものの“かたち”や“つくり”といった内容物の形式に注目していたのに対し、この第Ⅲ因子では、描線の濃い薄いといった線の特徴へと視点がうつり、解釈の手がかりとしていることが分かる。しかしながら、熟練者の着目点に共通して見られる「激しさ-穏やかな」「ゆったりした-せかせかした」の2項目は含まれていないことから、鉛筆の運びや流れを時間的推移に沿って直に追いかけていくような姿勢、描線の伸びや速度に注目する視点が、初学者の着目点には含まれていないことがわかる。

以上のような特徴を踏まえると、熟練者は筆跡の特徴を丁寧に吟味し、描かれた状況を自ら追体験しながら追いかけていくことで、解釈の手がかりを見出していくのに対し、初学者は描画側から発せられる色(濃淡)の強さや表現の特異性など、自己主張やアピールの強いものを受け止め、着目

して、解釈を行う傾向が見て取れる。熟練者に比べると、いくらか受身的な姿勢で解釈に臨んでいると考えられるのではないだろうか。初学者は描き手が積極的に見せようとする意図的な表現に、目を奪われやすいという傾向が浮き彫りになったと考えられる。藤掛（1996）は家族画の分析を通して、初学者が「印象で、入り口で踏みとどまったり、あるいは一点決め打ちで突き進みすぎる」のに対し、熟練者は「具体的な内容を分析して踏み込み、多面的な分析で進んでいく」ことを指摘しているが⁷⁾、同様のことが、星と波描画テストの解釈過程においても生じているのではないだろうか。つまり星と波描画テストでは、初学者が一目見たときにアピール性の強いものに動かされてしまう一方で、熟練者は筆跡の特徴のひとつひとつを吟味し、具体的な手掛かりをもとに、慎重かつ積極的に情報を統合していく様子が見えようかということができる。

4) まとめ

第Ⅰ因子は、形式的特徴に着目した「画面構成」と解釈され、第Ⅱ因子は「描画の表情」、そして第Ⅲ因子は形式的特徴のなかでも筆跡の特徴を通じて発せられるメッセージ性に着目した「アピール性」と解釈された。これらはそれぞれ、星と波描画テストの初学者が解釈の手がかりとして着目する全体的印象の特徴であることが示唆された。

(2) 初学者と熟練者の着目点の相違、および留意点

本研究の結果、初学者の解釈における着目点について、熟練者とは異なる因子構造を持つことや、各因子の特徴の違いが指摘されてきたが、本節では、これまでの見解を大きく分けて3点にまとめ、初学者および熟練者の着目点の相違を明示する。加えて、初学者が星と波描画テストを解釈する際に、どのような点に注意しながら解釈を行う工夫が望ましいのか、すなわち、熟練者の視点を手掛かりとしつつ熟練者の技に少しでも近づく工夫として、具体的に何が考えられるのかについて

提案を試みる。

1) 初学者の着目点の特徴について

熟練者の見解との比較を通じて明らかとなった初学者の着目点の傾向は、大きく分けて以下の4点と考えられる：

a) 着目点が3点にとどまる（3因子構造）・描画解釈の判断基準がより未分化である

星と波描画テストの初学者群より抽出されたのは第Ⅰ因子「画面構成」、第Ⅱ因子「描画の表情」、第Ⅲ因子「アピール性」の計3つにとどまっている。一方の熟練者の結果は4因子構造であることから、初学者において、情報を収集する際の視野がいくらか限定されることが明らかとなった。

第Ⅰ因子を例に挙げると、この「画面構成」の因子を構成する10項目は、熟練者の「情景性」の4項目および「整合性」の4項目とほぼ重なりを見せているのを見て取れる。したがって、初学者が着目する全体的印象の方向性は熟練者のそれとおおよそ一致しているものの、熟練者のように「情景性」「整合性」を弁別する視点を持ち合わせていないことから、同じ描画の全体的印象を見つめたときに、得られる情報の種類が少なくなる可能性が高いと考えられる。

b) 絵画作品としての完成度や巧拙に注目する傾向がみられる

初学者の第Ⅰ因子についての説明で触れたように、絵としての出来や完成度を示す形容詞が含まれていることから、描き手の技巧や作品の巧拙を手掛かりとして全体的印象をとらえる傾向が見受けられる。本研究において調査にご協力いただいた初学者はみな、描画をはじめとする芸術的な手法に比較的親しんでいる臨床家の方々であるが、それでもなお、新しい技法を初めて学ぶ過程においては、いわゆる「絵のうまい下手」を判断基準の一部として取り入れるのではないだろうか。非専門家の多くに共通すると考えられる、素朴で一般的な感覚が影響を与えるのだろうと考えられる。日常生活の中で、我々の多くが絵画作品を見る際

に「絵のうまい下手」にこだわってしまうのには、自分達がこれまで受けてきた美術教育の影響を無視できないと思うが、これについては別で論じているので¹¹⁾、ここでは扱わないこととする。

c) 絵画作品として、距離を置いて眺める視点が優勢である（追体験の乏しさ）

初学者の第Ⅱ因子「描画の表情」と、熟練者の第Ⅰ因子「生命感」を比較すると、先述のように、それぞれを構成する項目の一部は重なりを見せているものの、前者を構成する項目には、後者に見られるような描画空間内での体験に関する項目、すなわち視覚および肌感覚でとらえることで初めて得られるような居心地の良さや温もり等の形容詞が含まれていないことが明らかとなった。したがって、星と波描画テストの初学者は描画に「入って」特徴を捉えていくというよりはむしろ、やや距離を置いて遠くから絵全体を眺めるような視点、いわば描画の表情ともいべき表層部分をさらりと見て特徴を理解しようとする視点が中心的であると考えられる。極端に言うならば、実際の描画場面での描き手とセラピストのやり取りに思いを馳せることは少なく、描かれた場所と時間の臨場感から切り離された、単純にモノとしての絵画、美術作品としての絵画を平面的に扱う視点・姿勢にとどまっているとも言える。

d) 大胆な表現や視覚的にインパクトのある表現に注目する傾向がある

初学者の第Ⅲ因子「アピール性」と、熟練者の第Ⅱ因子「強調」に集約される項目の一部は重なりを見せており、着目点のおおまかな方向性としては一致する部分も見受けられる。しかし初学者の場合、熟練者のように筆跡の特徴（とくに運筆の特徴）から緻密な判断を行うというよりも、一瞬にして目に留まるような奇抜でインパクトのある大胆な表現や、筆跡の色調（濃淡など）に目をうばわれ、目が離せなくなるといった一種の視野狭窄に陥るよう見受けられる。結果、初学者において判断の柔軟性が乏しくなることから、熟練者に共通するような多面的で統合的な解釈が阻害

され、性急で一面的な解釈に陥る傾向が示唆される。

2) 初学者における描画解釈上の留意点—熟練者の解釈の技に近づくために—

本研究を通じて、初学者の描画に対するまなざしと熟練者のまなざしとは、いくらか隔たりがあることが明らかとなった。今回の結果を踏まえて、初学者が熟練者の視点に近づくために、星と波描画テストの解釈において具体的に注意が必要と思われる点、工夫が必要な点は以下の4点と考えられる：

a) 熟練者の「情景性」と「整合性」の着目点を意識して、星と波描画テストの解釈に臨むこと

初学者の着目する全体的印象の方向性は熟練者のそれと一致しているところもあるが、全体的に漠然としていて大まかであることから、熟練者の着目点を参考にすることで、きめ細やかでシャープな読み取りに近づくことが可能になるのではないかと考えられる。具体的には、初学者は「情景性」「整合性」を弁別する視点を持ち合わせていないことから、

- ①奥行きと広がりのある風景らしい構図がみられること（情景性）
- ②描き手の情緒体験が風景の中に込められているか否かの視点（情景性）
- ③空間構成として形式的に整っているか、統合性がみられるかどうか（整合性）

といった特徴に注目し、積極的に意識しながら読み取りを進めていく姿勢を保つことが、きめ細やかな読み取りを可能にする出発点と考えられる。そして経験を重ねるうちに、熟練者に近似の解釈の軸が次第に身につくのではないかと期待する。

b) 絵画作品としての完成度や巧拙に、解釈を引きずられないよう注意すること

初学者は星と波描画テストと対峙した際に、絵画作品を鑑賞するときの従来の視点、すなわち絵画作品としての完成度や巧拙に目を配る傾向に影響されやすいと考えられる。しかし興味深いこと

に、熟練者が星と波描画テストの解釈を導き出すプロセスにおいては、絵の巧拙に関する視点は手がかかりとして全く役立てられていないことから、初学者が星と波の描画に対峙する際には、“あえて” 絵画作品としての完成度や技巧、いわゆる絵のうまい下手以外の特徴に積極的に目を配るよう、意識的に努力する必要があるのではないかと思われる。つまり「この絵は上手いな」と感じたときこそ注意が必要であり、藤掛（1996）が指摘するように、「サインの一つにこだわり、読みの流れを作っている傾向がある」可能性が考えられるため⁷⁾、「絵が上手である」という印象で立ち止まるのではなく、そこからあえて一歩歩き出すこと、つまり、巧拙以外の特徴を自ら積極的に探索しようとする姿勢が、読み取りの精度を上げるためには不可欠であると考えられる。

c) 描画に“入って感じる”姿勢を導入する

熟練者の場合、星と波描画テストを遠くから眺めるというよりはむしろ、描画空間内でのくつろぎの度合いをはかるような姿勢や、画面全体から弾力性に満ちた躍動感を積極的に感じ取る姿勢が見受けられる。このような視点はBorlanderの「直観的熟視の段階」⁶⁾に通ずるものがあり、いうならば“(描画に)入って感じる”やや原始的ともいえる感覚を伴うであろうと考えられる。したがって、初学者に共通して見受けられたように、星と波描画テストを絵画として遠くから眺めて印象を述べるのにとどまるのではなく、描画上に示された描き手の情緒体験を鑑賞者が身をもって体験するような姿勢で臨む工夫が必要ではないかと思われる。星と波描画テストは風景画の要素を持ち合わせていることから、描き手とふたりで枠の内側に入り込み、描かれた風景の中に二人で行んでいるような感覚を共有しやすいという特徴がある。¹¹⁾ ふたりで五感を駆使して描き手の心の風景・世界を体験することで(海の水は冷たいだろうか。空気はこちよいだろうか。波の音はどのくらい大きくて、どんな音だろうか？人の気配はあるのか？等)、新たに見えてくる描き手の特徴は少なからずあるだろうと考えられる。あえて

“(描画に)入って感じる”姿勢を、工夫のひとつとして提案したい。

d) 筆跡の特徴（とくに筆の運び）に積極的に目を配り、こちらが挑むような姿勢で分析を試みること

初学者は熟練者のように、筆跡の特徴、なかでも鉛筆の線の伸びや流れといった動きの側面に注意が行き届かない傾向が見受けられる。したがって、たとえば筆圧の強さ（濃淡の濃さ）や奇抜な表現といった、こちら側が何もしなくても、向こうから勝手に目に飛び込んでくるような特徴に目をうばわれるのではなく、自分から積極的に向こう側（描画）を見つめ、切込み、判断していくような姿勢を意識して身に着けていくことが、様々な情報を統合して的確な解釈を導き出すためには大切だと考えられる。本研究で明らかとなったように、初学者は、どうしてもインパクトのある大胆な表現に引きずられる傾向があり、パッと見たときには目に留まらないような運筆や画面の処理方法などの比較的地味な特徴について、十分に把握できず、情報が抜け落ちていることが多い。しかしながら経験上、こうした一見目立たないところに、さりげなく描き手の訴えが見え隠れしているケースも少なくないことから、初学者は自ら積極的に描画に挑むような姿勢を保つことで、描画全体にくまなく目を配ることができ、さまざまな情報を統合することで、描き手からの複合的なメッセージをより確かに受け取ることができるようになるのではないだろうか。緻密で的確な解釈が可能になるということは、描き手からのメッセージをより確かに受け止めることができるようになるということと、ほぼイコールであり、同時進行だと考える。

(4) 今後の課題

本研究を通じて、星と波描画テストの初学者のまなざしの特徴が浮き彫りとなり、加えて、彼らが本テストの解釈を習熟するにあたり、熟練者の着目点を参考としたいいくつかの有効な手がかりが得られたと考えられる。一般的に“施行は簡便だ

が読み取りが難しい”とされる星と波描画テストをめぐり、技法として身に着けるための具体的な手がかりを提案することができたという点で、今回得られた見解が、初学者にとって学びの一助となることを願ってやまない。描き手からの様々なメッセージをさりげなく、しかし着実に受け止めることができるようになることで、描き手の回復や成長が促進されると考えられ、本テストがより多くの心理臨床場面で役立てられることを願っている。

なお反省点として、本研究では初学者と熟練者の着目点の共通項への言及は行わなかったことから、今後も引き続き、共通点をも含めた、描画解釈のまなざしをめぐる議論を深めていきたいと考えている。また今回の研究では、対象を臨床経験のある臨床家に限定していたことから、今後、大学や大学院での心理臨床の教育を考えるにあたり、臨床経験の少ない学生に焦点を当てた研究も並行して進めていきたいと考えている。

また本研究は、星と波描画テストに限った解釈の視点について議論であるが、他の描画テストとの比較検討を行うことで、星と波描画テストに特有の解釈のポイントが客観的な視点を通じて浮き彫りになるのではないかと考えられる。これらの点については今後引き続き検討を重ねていきたい。

付記

本研究は、日本心理臨床学会第26回大会(2007年)および第28回大会(2009年)での発表内容の一部を、加筆修正したものである。当日、コメントをいただいた先生方をはじめ、本研究にご協力いただいた方々に深謝申し上げます。また、本研究をまとめるにあたり、貴重なご意見とご指導を賜りました横山恭子先生(上智大学)をはじめ、日々の臨床と研究を支えてくださった諸先生方と多くの方々に、心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 青木健次(1980) 描画法における全体印象について 京都大学教育学部紀要,26,129-140
- 2) 青木健次(1981) 空間象徴の基礎的研究 芸術療法,12,7-12
- 3) Ave-Lallemant,U (1979/1994) Der Sterne-Wellen-Test Ernst Reinhardt Verlag
- 4) Ave-Lallemant, U 小野瑠美子訳(1979/2000) 星と波テスト 川島書房
- 5) 馬場禮子(2003) 投映法—どう理解しようか— 臨床心理学,3,4,447-453
- 6) Bolander,K. 高橋依子訳(1977/1999) 樹木画によるパーソナリティーの理解 ナカニシヤ出版
- 7) 藤掛明(1996) 描画解釈における着眼点のパターン分析 臨床描画研究,11,p.122~139
- 8) Furth, G.M. 老松克博・角野善宏訳(1998/2001) 絵が語る秘密 日本評論社
- 9) 香月菜々子(2006) 星と波描画テストに見られる、青年期・成人期の精神科外来患者の描画特徴について. アーツセラピー研究所紀要,1,11-21
- 10) 香月菜々子(2006) 星と波描画テストにおける“回復サイン”仮説の提言 日本芸術療法学会誌 37, 39-56
- 11) 香月菜々子(2009) 星と波描画テスト 基礎と臨床的応用 誠信書房
- 12) 香月菜々子(2013) 星と波描画テストに移る情緒体験の様相—ロールシャッハ・テストとの比較を通じて—大妻女子大学心理相談センター紀要,9,10,25-39
- 13) 香月菜々子・横山恭子(2007) SD法による星と波テスト(SWT)の印象評定尺度の作成解釈における着目点について上智大学心理学年31,83-96
- 14) 三上直子(1995) S-HTP法 誠信書房
- 15) 鍋田恭孝(2003) 心理検査「バウムテスト」バウムテストの読み方—効用と限界— 16) 臨床心理学,3,4,555-561
- 17) Osgood, C.E. (1952) The nature and measurement

of meaning. *Psychological Bulletin*, 49, 197-237

- 18) リーネルB・杉浦京子・鈴木康明 (2000) 星と波
テスト入門 川島書房
- 19) 高橋雅春・高橋依子 (1986) 樹木画テス
ト 文教書院